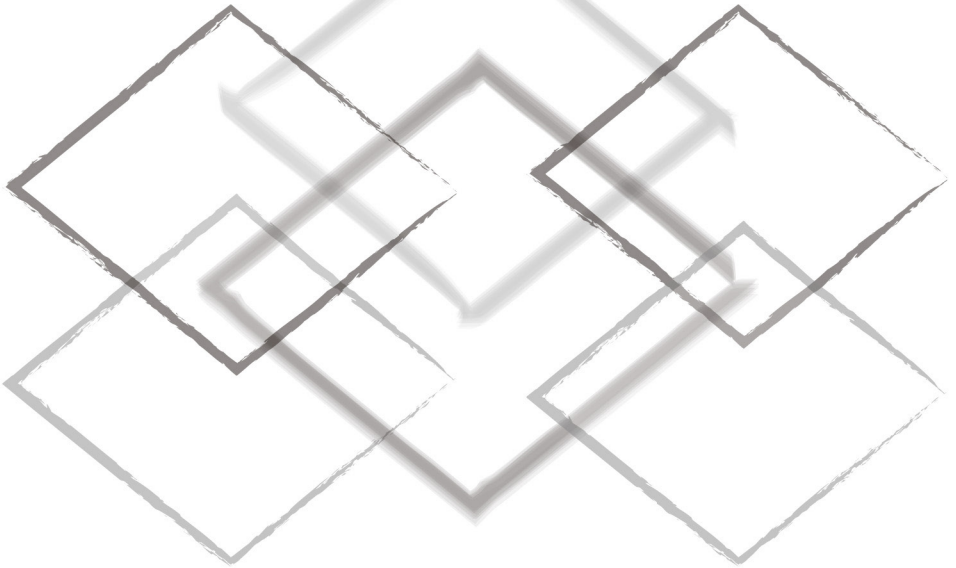


芥川

竜之介

藪の中



一冊堂青空文庫

藪の中

芥川龍之介

検非違使に問われたる木樵りの物語

さようでございます。あの死骸しがいを見つけたのは、わたしに違いございません。わたしは今朝けさいつもの通り、裏山の杉を伐りきに参りました。すると山陰やまかげの藪やぶの中に、あの死骸があつたのでございます。あつた処ところでございますか？ それは山科やましなの駅路からは、四五町ほど隔たつて居りましょう。竹の中に痩せ杉やせ杉の交まじつた、人気ひとけのない所でございます。死骸は縋はなだの水干すいかんに、都風みやぎふうのさび烏帽子をかぶつたまま、仰向あおむけに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございすから、死骸のまわりの竹の落葉すほうは、蘇芳すほうに滲しみたようでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾かわいて居つたようでございます。おまけにそこには、馬蠅うまばえが一匹、わたしの足音も聞えないように、べつたり食いついて居りましたつけ。

太刀たちか何かは見えなかったか？ いえ、何もございません。ただその側の杉の根がた

に、縄が一筋落ちて居りました。それから、——そうそう、縄のほかにも櫛が一つございました。死骸のまわりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございません。何、馬はいなかったか？ あそこは一体馬なぞには、はいれない所でございます。何しろ馬の通う路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

検非違使に問われたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、——さあ、午頃でございます。しょう。場所は関山から山科へ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は牟子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、——確か法師髪の馬のようでした。丈でございますか？ 丈は四寸もございましたか？ ——何しろ沙門の事でございますから、その辺ははつきり存じ

ません。男は、——いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携えて居りました。殊に黒い塗り箆へ、二十あまり征矢をさしたのは、ただ今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかようになろうとは、夢にも思わずに居りましたが、真に人間の命なぞは、如露亦如電に違いございません。やれやれ、何とも申しようのない、気の毒な事を致しました。

検非違使に問われたる放免の物語

わたしが搦め取った男でございますか？　これは確かに多襄丸と云う、名高い盗人でございます。もつともわたしが搦め取った時には、馬から落ちたのでございましょう、栗田口の石橋の上に、うんうん呻って居りました。時刻でございしますか？　時刻は昨夜の初更頃でございます。いつぞやわたしが捉え損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。ただ今はそのほかにも御覧の通り、弓矢の類さえ携えて居ります。さようでございしますか？　あの死骸の男が持っていたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違いございません。革を巻いた弓、黒塗りの箆、鷹の

羽の征矢（そや）が十七本、——これは皆、あの男が持っていたものでございましょう。はい。馬もおつしやる通り、法師（ほうし）の月毛（つきげ）でございませう。その畜生（ちくしょう）に落されるとは、何かの因縁（ねん）に違いございませう。それは石橋の少し先に、長い端綱（はづな）を引いたまま、路ばたの青芒（あおすすき）を食って居りました。

この多襄丸（たじようまる）と云うやつは、洛中（らくちゆう）に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございませう。昨年の秋鳥部寺（とりべでら）の寶頭（びんずる）の後の山に、物語（ものがたり）でに來たらしい女房（め）が一人、女の童（わらわ）と一しよに殺されていたのは、こいつの仕業（しわざ）だとか申して居りました。その月毛に乗っていた女も、こいつがあつた男を殺したとなれば、どこへどうしたかわかりませう。差出（さしで）がましゆうございませうが、それも御詮議（ごせんぎ）下さいます。

検非違使（けんびゐし）に問われたる姫（むすめ）の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附（かたづ）いた男でございませう。が、都のものではございませう。若狭（わかさ）の国府（こくふ）の侍でございませう。名は金沢（かなざわ）の武弘、年は二十六歳でございませう。いえ、優しい氣立（きだて）でございませうから、遺恨（いこん）なぞ受ける筈はございませう。

娘でございますか？ 娘の名は真砂まさご、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬくらい、勝気かつきの女でございますが、まだ一度も武弘むこうのほかには、男を持った事はありません。顔は色の浅黒い、左の眼尻めじりに黒子ほくろのある、小さい瓜実顔うりざねがおでございます。

武弘むこうは昨日娘と一しよに、若狭へ立ったのでございますが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございましょう。しかし娘はどうなりましたやら、婿むこの事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥うばが一生のお願いでございますから、たとい草木くさきを分けましても、娘の行方ゆくえをお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸たじようまるとか何とか申す、盗人ぬすびとのやつでございます。婿ばかりか、娘までも……
(跡は泣き入りて言葉なし)

×

×

×

多襄丸たじようまるの白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問こうもんにかけら

れても、知らない事は申されますまい。その上わたしもこうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはそのためもあつたのです。う、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のように見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなどは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派に生きている、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山

科しなの駅路えきろでは、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫くふうをしました。

これも造作ぞうさはありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚ふるづかがある、この古塚こづかを発あはいて見たら、鏡や太刀たちが沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰やぶの藪やぶの中へ、そう云う物を埋うずめてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲と云うものは恐いではありませんか？ それから半時はんときもたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路やまみちへ馬を向けていたのです。

わたしは藪やぶの前あいだへ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲に渴かわいていますから、異存いぞんのある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待つていると云うのです。またあの藪の茂さかっているのを見ては、そう云うのも無理がありますまい。わたしはこれも実を云えば、思う壺つぼにはまったのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。

藪はしばらくの間は竹ばかりです。が、半町はんちようほど行った処に、やや開いた杉むらがあ

る、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合の**つごう**の**いい**場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もつともらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう瘦せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早い、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩**は**いているだけに、力は相当にあつたようですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括**く**りつけられてしまいました。縄**なわ**ですか？ 縄は盗人**ぬすびと**の有難さに、いつ塀を越えるかわかりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を頬張**ほおば**らせれば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片附けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも凶星**ずほし**に当つたのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠**いちめがさ**を脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいつて来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛**しば**られている、——女はそれを目見るなり、いつのまに懷**み**から出していたか、きらりと小刀**さす**を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈**はげ**しい女は、一人も見つた事がありません。もしその

時でも油断していたらば、一突きに脾腹ひばらを突かれたでしょう。いや、それは身を躲かくしたところが、無二無三むにむざんに斬り立てられる内には、どんな怪我けがも仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸たじようまるですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀さすがを打ち落しました。いくら氣の勝った女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはとうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、——そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後あとに、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣違きちがひいのように縋すがりつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥はじを見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男につれ添そいたい、——そうも喘あえぎ喘あえぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。（陰鬱いんうつなる興奮）

こんな事を申し上げると、きっとわたしはあなた方より残酷ざんこくな人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳ひとみを見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴かみなりに打ち殺されて

も、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、——わたしの念頭（ねんとう）にあったのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑（いや）しい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒（けたお）しても、きつと逃げてしまったでしょう。男もそうすればわたしの太刀（たち）に、血を塗る事にはならなかったのです。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那（せつな）、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯（ひきょう）な殺し方はしたくありません。わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをしろと云いました。（杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです。）男は血相（けっそう）を変えたまま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなったかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目（ごうめ）に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思っていますのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけです。ら。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、女の方を振り返りまし

た。すると、——どうです、あの女はどこにもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡あとも残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉のどに、断末魔だんまつまの音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐって逃げたのかも知れない。——わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪ったなり、すぐにまたもとの山路やまみちへ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後の事ことは申し上げるだけ、無用の口数くちかずに過ぎますまい。ただ、都みやこへはいる前に、太刀だけはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は樗おうちの梢しんげに、懸ける首と思っっていますから、どうか極刑ごくけいに遇わせて下さい。（昂然こうぜんたる態度）

清水寺に来れる女の懺悔ざんげ

——その紺こんの水干すいかんを着た男は、わたしを手ごめにしてしまうと、縛られた夫を眺めな

がら、嘲あざけるように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶みもだえをしても、体中からだじゅうにかかった縄目なわめは、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ぶように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟とつさの間に、わたしをそこへ蹴倒あいたしました。ちょうどその途端とたんです。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝きが、宿っているのを覚さとりました。何とも云いようのない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震みふるいが出ずにはいられません。口さえ一言も利きけない夫は、その刹那せつなの眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃ひらめいていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑さげすんだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう氣を失ってしまいました。

その内にやっと氣がついて見ると、あの紺こんの水干すいかんの男は、もうどこかへ行っていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛しばられているだけです。わたしは竹の落葉の上に、やっと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり冷たい蔑さげすみの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、——その時のわたしの心の中うちは、何と云えば好よいかわかりません。わ

たしはよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥^{はじ}を御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は忌^{いま}わしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂^さけそうな胸を抑えながら、夫の太刀^{たち}を探しました。が、あの盗人^{ぬすびと}に奪^{さら}われたのでしよう、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし幸い小刀^{さすが}だけは、わたしの足もとに落ちていますのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やっと唇^{くちびる}を動かししました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えません。が、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑^{はなだ}んだまま、「殺せ。」と一言^{ひと言}云つたのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹^{はなだ}の水干の胸へ、ずぶりと小刀^{さすが}を刺し通しまし

た。

わたしはまたこの時も、氣を失つてしまったのでしよう。やつとあたりを見まわした時には、夫はもう縛られたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交つた杉むらの空から、西日が一すじ落ちています。わたしは泣き声を吞みながら、死骸の縄を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしがどうなったか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力ありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る力がなかったのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている限り、これも自慢げにはなりませんまい。（寂しき微笑）わたしのように腑甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわたしは、一体どうすれば好いのでしょうか？ 一体わたしは、——わたしは、——（突然烈しき歔歔）

巫女の口を借りたる死霊の物語

ぬすびと

——盗人は妻を手ごめにする、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。

おれは勿論口は利けない。体も杉の根に縛しばられている。が、おれはその間あいだに、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真まに受けるな、何を云つても嘘と思え、——おれはそんな意味を伝えたいと思った。しかし妻は悄然しょうぜんと笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬ねたしさに身悶みもだえをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ、——盗人はとうとう大胆だいたんにも、そう云う話さえ持ち出した。

盗人にこう云われると、妻はうつとりと顔を擡もたげた。おれはまだあの時ほど、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有ちゆううつに迷っていても、妻の返事を思い出すごとに、嗔しん恚いに燃えなかつたためしはない。妻は確かにこう云つた、——「ではどこへでもつれて行つて下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇やみの中に、いまほどおれも苦しみは

しまい。しかし妻は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、たちまち顔色がんしよくを失ったなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられません。」——妻は気が狂ったように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のように、今でも遠い闇の底へ、まっ逆様さかさまにおれを吹き落そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるか？ 一度でもこのくらい呪わしい言葉が、人間の耳に触れた事があるか？ 一度でもこのくらい、——（突然ぽとぽし迸るちやうしやうとき嘲笑）その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの人を殺して下さい。」——妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋すがっている。盗人はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴けたおりに蹴倒された、（再びふたたび迸るちやうしやうとき嘲笑）盗人は静かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやった。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事はただ領うなずけば好よい。殺すか？」——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦ゆるしてやりたい。（再び、長き沈黙）

妻はおれがためらう内に、何か一声叫こゝろこゝろぶが早い、たちまち藪の奥へ走り出した。盗

人も咄嗟に飛びかかったが、これは袖さえ捉えなかったらしい。おれはただ幻のように、そう云う景色を眺めていた。

盗人は妻が逃げ去った後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄を切った。「今度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまう時に、こう呟いたのを覚えていいる。その跡はどこも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声がする。おれは縄を解きながら、じつと耳を澄ませて見た。が、その声も気がついて見れば、おれ自身の泣いている声だったではないか？（三度、長き沈黙）

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光っている。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさだろう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに来ない。ただ杉や竹の杪に、寂しい日影が漂っている。日影が、——それも次第に薄れて来る。——もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。

が、おれのまわりには、いつか薄闇^{うすやみ}が立ちこめている。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀^{さすが}を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮^{あふ}が溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有^{ちゆうう}の闇へ沈んでしまった。……

（大正十年十二月）

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
